データ連携・利活用における現状と課題

名古屋大学

河口 信夫

自己紹介:河口信夫(かわぐち のぶお)



名古屋大学 工学研究科 情報・通信工学専攻 教授 (未来社会創造機構モビリティ社会研究所 副所長)



TMI (超学際移動イノベーション) 卓越大学院 コーディネータ 自動運転ベンチャー (株) ティアフォー フェロー NPO法人位置情報サービス研究機構(Lisra) 代表理事総務省スマートIoT推進フォーラム テストベッド分科会長中部地方測量部 地理空間情報産学官中部地区連絡協議会 CODE for Nagoya 名誉代表, UDC2020愛知ブロック 代表



Lisca

- ・研究テーマ: ユビキタス・コンピューティング
 - 代表的な成果: HASC コーパス/ツール
 - カウントダウン時刻表アプリ「駅.Locky」(300万人が利用)
 - 需給交換プラットフォーム/社会活動OS Synerex





駅.Locky

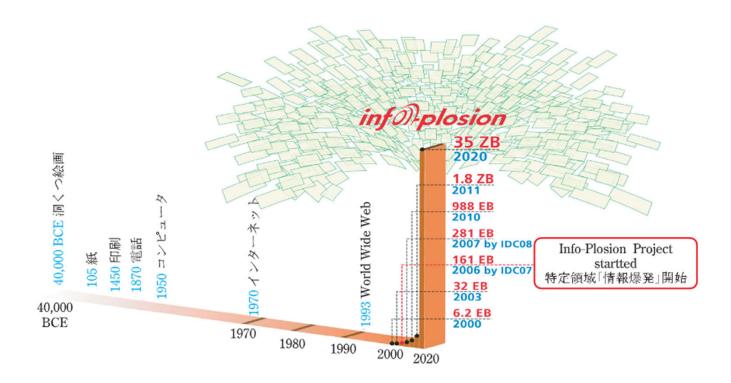


データとは?情報とは?

- 実世界データが情報化され、蓄積・利用されるように なったのはいつから?
- 実用的な規模で使えるようになったのは、1995年ごろか (インターネット/Windows95あたり)
- IoTというキーワードは 1999年に登場

研究分野におけるデータ

• 科研特定領域研究「情報爆発」(2005年~2011年)



https://www.ieice.org/jpn/books/kaishikiji/2011/201108.pdf

情報大航海プロジェクト

(2007年~2009年)

- 大規模データを 知的にアクセスする 仕組みを構想
- 下のような連携の構想も

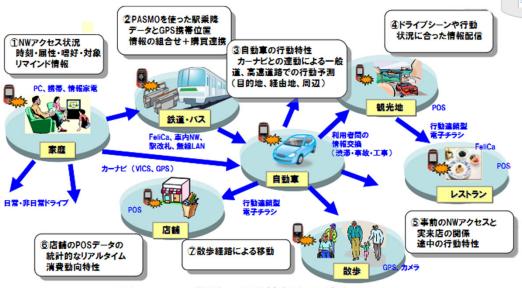


図3-2 異種の行動情報との統合



図1-2 情報大航海プロジェクトの趣旨

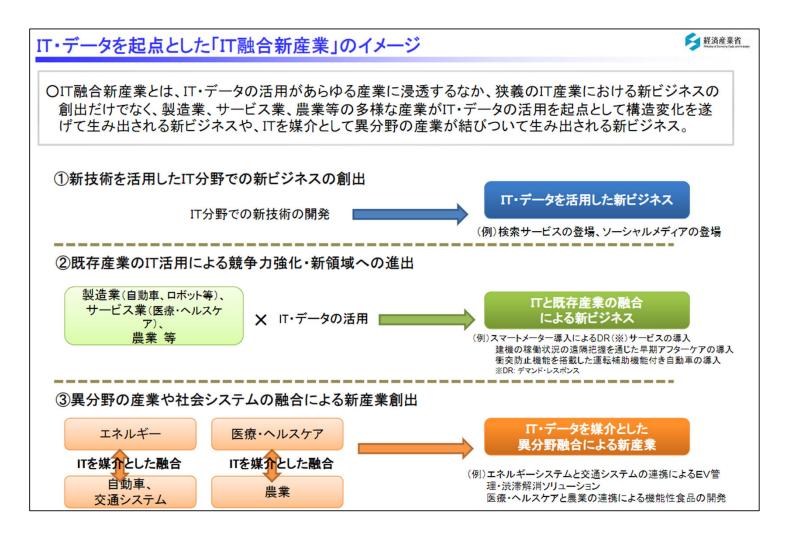
先進的なサービスのイノベーション

https://www.meti.go.jp/policy/tech_evaluation/c00/C0000000H22/110107_jyouhou1/07-2.pdf

データ連携・利活用とは?

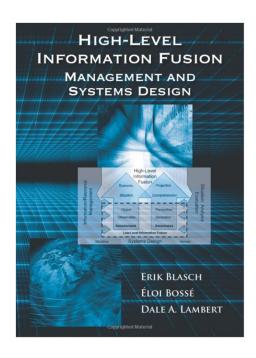
- 国内でもコンセプトとしては以前から
 - KAKEN/GRANTSデータベースで「データ連携」を検索すると 2001年から報告
 - NEDO成果報告書データベースだと、2017年からだが、 2011年からは「IT融合」が登場
- ・特に「IT融合」は「IT・データを起点としたIT融合新産業」 を目指していた
 - 経済産業省産業構造審議会情報経済分科会が「融合新産業」

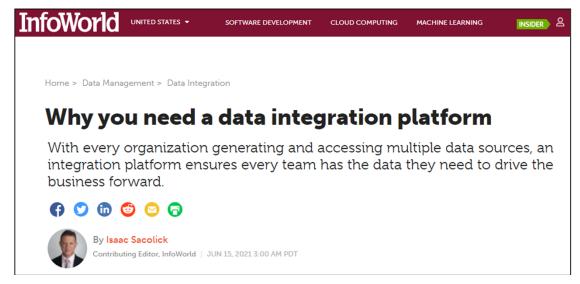
2012年の経産省報告書



国際的な観点では?

- データ連携の直訳は Data Linkage.
- あえて言えば Information Integration/Fusion





オープンデータ

オープンデータ:政府・世界の動向

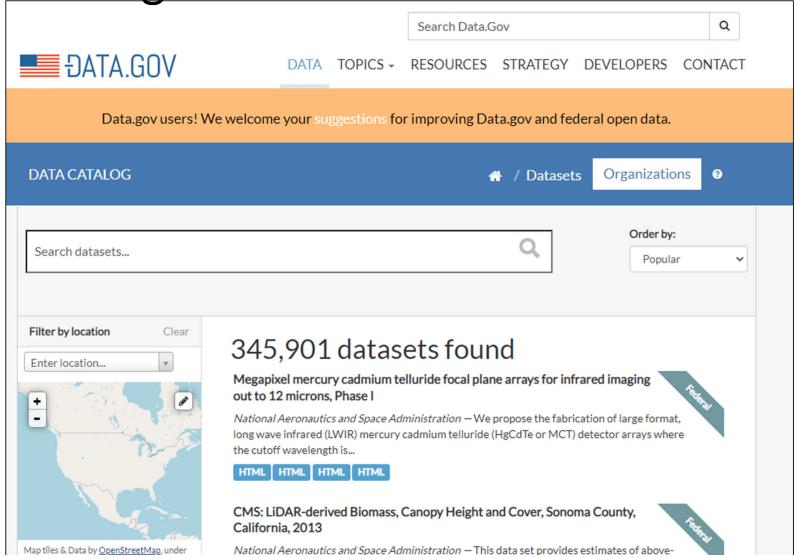
日本政府:

- I T戦略本部「電子行政オープンデータ戦略」(2012/7)
- ・総務省「オープンデータ流通推進コンソーシアム」(2012/7)
- 経産省「IT融合フォーラム」公共データWG (2012/8)
- ・「官民データ活用推進基本法」 (2016年制定・施行)
- 「オープンデータ基本方針」(2017年5月制定, 2021年6月改正)

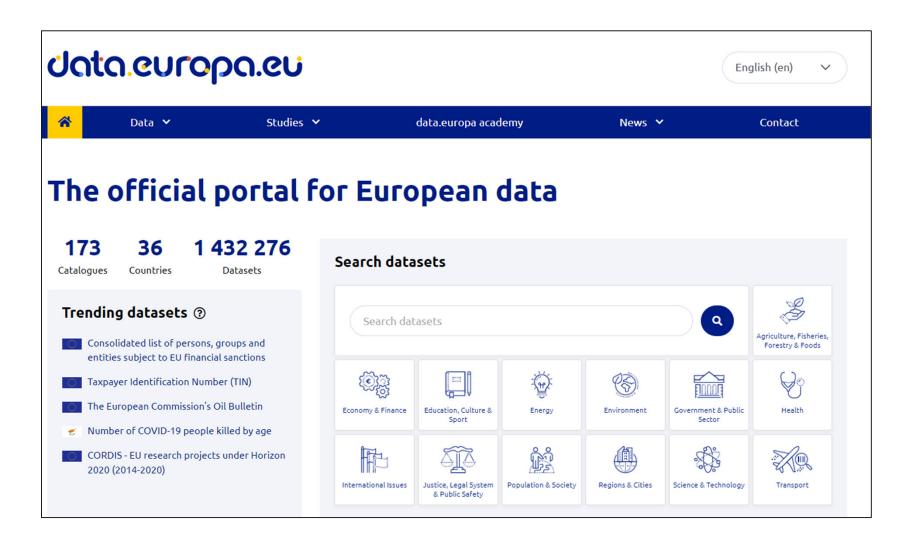
世界のオープンデータの状況:

- 欧州:公共部門情報の公開令(EUとして)(2003→2011) (re-use of public sector information) → 戦略として2011 に策定
 ロンドン、ストックホルム等、多数の都市でデータ公開
- 米国: Open Government Directive(2009:オバマの戦略)
 - 39州、35都市、171機関がデータ公開サイト
 - 2019年に Trump が「R SHQ # ryhugp hqw#dwd#bfw」に署名
- G8: オープンデータ憲章 (2013/8)

米国:<u>data.gov</u>



欧州: data.europa.eu



日本: data.go.jp



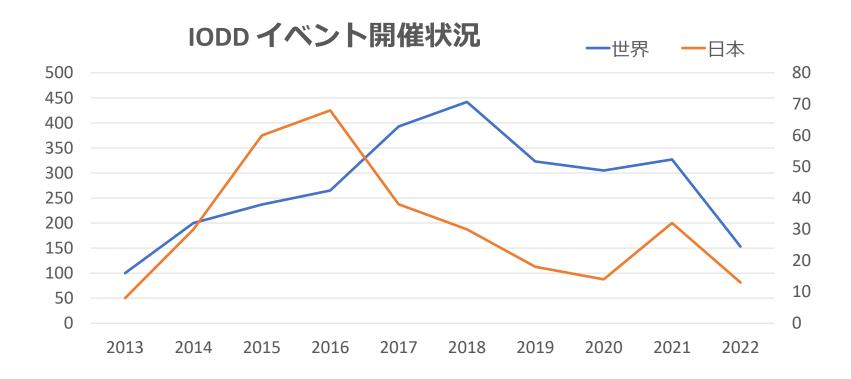
⋒ / データセット



オープンデータ活動

- ・公共データを原則公開する、という方向性は重要
 - しかし、夢見るような成果が出続けるわけではない
- IODD(International Open Data Day) も、 以前ほどの盛り上がりに欠ける

https://github.com/okfn/opendataday



データ連携・利活用に関する幻想(私見)

- データが大量にあると「何か」できそうな気がする良いデータを組み合わせれば、より良い成果が生まれる幻想
- 単一のデータから「価値」の生成(データマイニング)→ すでに十分に難しい
- ・複数のデータから「価値」が生み出せるのか? (安易に思いつく内容であれば、普通はすでに実施済み)
- 結果として、これまでのプロジェクトで、いわゆる

キラーアプリ(応用)

みつからず。。。

データ連携の難しさ

- 多くの場合、嬉しいのは「ニッチ」な内容
 - コストをかけるまでもないけど、データがあると嬉しい
 - 大きな価値にはつながらない
- 「高付加価値」なデータは、やはり有償データ
 - 連携前に、生まれる価値が検証しずらい
- 結局、これまで扱いが困難だったデータの活用が重要

利活用の観点

データ変換を自動で できる枠組みが必要

- データのメタデータを標準化すべき
 - データはどのような条件で取得されたか
 - それぞれの値がどんな単位か
 - どうやって変換すればよいか(粒度・単位)
- 大規模なデータ処理を手軽にやる枠組み
 - どんなデータを扱っているか、早く知りたい (簡単なブラウザが必要)
 - 可視化の枠組みが足りていない
 - ・特に時空間データ → データ分析・可視化TFで活動中

サービス連携の観点

- ・データ連携ではどうしても、価値あるデータの 所有者により、組織間の分断を生みやすい
- サービス連携であれば、その間でサービス対価のやりとりが可能になるため、異なる組織間でも同意可能
- サービスを提供するための、データ連携、という仕組みを 考えてはどうか?



社会活動os



サービスを需要と供給に整理

• サービスの提供者と利用者の間での情報は

・需要

XXがしたい、XXに行きたい、 XXが欲しい

・供給

XXサービス提供、移動サービス提供 商品の提供

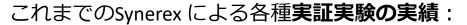
に整理できる。

- ・様々なサービスの変化/進化/成長に耐えられる仕組み
 - サービスの追加・変更により、システム全体が影響を受けない
 - 連携サービスの追加により、漸進的に高度化(進化)できる
- 「サービスの需要と供給」で整理され、多様なサービスが統合可能
- ストリーミングでの動作をメイン
 - リアルタイムでのデータ連携も可能に
- そのための実装コンセプト
 - マイクロサービス化
 - Pub/Subに加えて、サービスディスカバリと、多地点間メッセージ
 - ・標準プロトコルの考え方の導入(Protocol Buffer/gRPCの採用)

2020年度公募 共創の場形成支援プログラム「育成型」共創分野 2020.12-2022.3

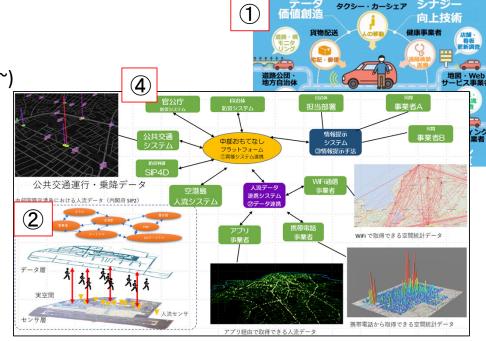
FUTUREライフスタイル社会拠点

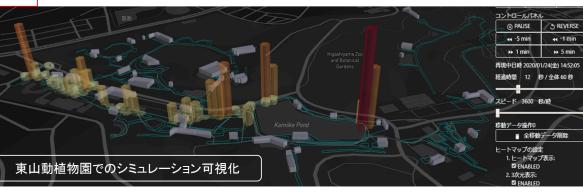
⇔ SYNEREX の実績



- ①愛知県幸田町におけるバス・タクシー連携実証(2018)
- ②中部国際空港(セントレア)における人流データ集約(2019~)
- ③東山動植物園における人流データ分析・可視化(2019~)
- ④中部おもてなしプラットフォーム実装(2020)
- ⑤Harmowareと連携し倉庫内搬送ロボットの運用(2020)







まとめ

- データ連携・利活用は、重要で何度も検討されてきた
- 目立った成果が無いように見えるのは「幻想」が原因
- データ活用の障害を可能な限り下げるべき
- サービス連携の仕組みで、分断が避けられる可能性

